



# JSHCT Letter No.28

The Japan Society for Hematopoietic Cell Transplantation

有限責任中間法人日本造血細胞移植学会

October 2007

発刊発行:有限責任中間法人日本造血細胞移植学会 〒461-0047 名古屋市東区大幸南一丁目1番20号 名古屋大学大幸医療センター内 TEL&FAX (052) 719-1824  
発行責任者:小寺 良尚(理事長) 編集責任:有限責任中間法人日本造血細胞移植学会編集委員会 <http://www.jshct.com> 発行:2007年10月

## 日本造血細胞移植学会近況報告

理事長 小寺 良尚

2007年度に入り早半年以上が過ぎ、秋を迎えつつある今、会員の皆様に学会の近況をお話したいと思います。

造血細胞移植情報管理学講座によるデータ一元化事業は2006年がその最初の実施年となりましたが、登録数で前年(血縁骨髄・末梢血、非血縁骨髄・臍帯血、自家)を上回り、先ずは順調なスタートを切ったと言えます。さい帯血バンクネットワークとも、データ交換のシステムで合意に達し、実施に向けて作業を行っているところです。又、本学会が積極的に関与することが合意された Asia Pacific Blood and Marrow Transplantation Group (APBMT, この学会のホームページは本学会ホームページにリンクされています)の主要な事業である Asian BMT Registryを、この一元化システムに基づいて構築する基本的合意が、アジア各国で得られ、その最初の登録が行われました。さらにこの Asian BMT Registryの発足は CIBMTR (Center of International Blood and Marrow Transplant Registry), EBMT (European Blood and Marrow Transplant Group) 並びに WMDA (World Marrow Donor Association) の知るところとなり、これら登録機構の様式を統一して造血細胞移植症例世界登録機構を構築しようとの動き (WWBMT; World Wide Blood and Marrow Transplantation Group) が始まって、今までに2006年12月 ASH (Orlando), 2007年2月 BMT Tandem Meeting (Keystone)、2007年3月 EBMT (Lyon) にそれぞれ付随して開かれた検討会議に、本学会と APBMT を代表する形で参加してまいりました。その進捗状況は近日中に HP 等を通じて又会員の皆様にお知らせいたしますが、この世界登録機構は症例初期情報の事前登録制になる可能性もあり、それを完全なものにするために医療保険適用の条件の一つにするというアイデアも出されています。もしそうなれば国民皆保険下のわが国においては文字通り全症例が事前登録されることになり、症例情報はドナー情報も含まみますので、全ての患者、ドナーは少し大げさに言えば、全世界に見守られて移植を受け、幹細胞を提供することになります。これは移植・採取チームに今一度自覚と緊張感を与え、移植成績の向上、ドナーの安全に繋がると考えています。各種委員会活動の中では、専門医制度委員会と

学会在り方委員会の共同作業で、本学会の専門(認定)医、専門(認定)看護師、認定施設の在り方をどうするかが検討されており、会員を縛り、格差をつけるものではなく、会員の自己向上を助け、各移植チームの更なる発展を助けるものにして行くことが合意されつつあります。更に在り方委員会では、他の関連学会、特に臓器別学会を横断する形の日本移植学会、日本輸血・細胞治療学会、日本アフェレーシス学会等並びに先にも述べた海外のAPBMT, BMT Tandem Meeting, EBMTと、相互の独自性を保ちつつ協力してゆくあり方について検討されることになっています。社保委員会では平成20年度健保改訂要望項目を提出、内保連に取り上げてもらい、厚労省のヒアリングも受けました。これは平成18年度と同じ造血幹細胞採取・ドナー安全管理に加算してもらおうというものですが、皆様にもご協力いただいた骨髓移植推進財団署名活動(基本的には学会と同一の要請)と相俟って、平成20年度の改訂が我々に有利なものであるよう見守って行きたいと思えます。臨床研究委員会では学会主導として初めての臨床研究を、TAM(Transplant-associated microangiopathy)をテーマにして始めます。ガイドライン委員会は今までの各種ガイドラインの更新に向けて精力的に作業を行っています。ドナー委員会は非血縁者間末梢血幹細胞移植の開始を厚生労働省に提言いたしました。現在、実際の採取に当り、どこでボランティアドナーにG-CSFを投与するのか、どこでどの様に採取するのか(外来ベースか入院か)、採取後まずは短期的に何時までドナーをフォローするのか等について学会の見解を纏める作業をしているところです。看護部会では韓国、台湾、中国のナースとの交流が開始されようとしています。その他、理事評議員選任委員会、編集委員会、倫理委員会もそれぞれの業務を遂行しています。次年度は理事が大幅に改選される時期に当たっております。本学会も若い学会といわれながらも今年度で第30回目の学術総会を迎えるまでになりました。本学会は造血細胞移植に情熱を持ち、日々移植に携わる現場の方々を主体とした学会です。今までのよき伝統を継承し、若い学会を更に若返らせる理事のメンバーが選出されることを望んでいます。これらの多様な学会業務を進捗管理し、実行していく上で中心となる事務局は3人体制(専任:1、パート:2)でかなり多忙ではありますが、その中で会員と会費の管理という主要業務は充実してきており、会員は尚増加し、会費の納入状況は向上しています。2008年12月1日には公益法人制度改革3法が施行され同法に基づく各種法人の再編成が開始されます。本学会が現在の有限責任中間法人から公益性の高い社団法人へ発展する上でも、今まで述べてまいりました学会の活動実績と運営能力は不可欠のものであります。本学会が、会員の自由な情報交換の場としての良き特質を堅持しながらも、その結果として現れる高い公益性を今後とも強くアピールすることにより、会員の皆様の要望が強い場合には公益社団法人を獲得出来るだけの力を蓄えて行きたいと思っています。

以上、学会並びにその周辺の現況と近未来につき述べさせていただきました。末尾になりましたが会員の皆様のご健勝をお祈りし、理事長からの報告とさせていただきます。

## 第30回 総会を主催するにあたって（その2）

学会総会 会長 平岡 諦

前号では「次世代骨髄移植」と「二つめのノーベル賞」について述べさせて頂いた。今回、総会のもう一つの主題である、造血細胞移植医療の「質の保証と向上」について述べさせて頂く。

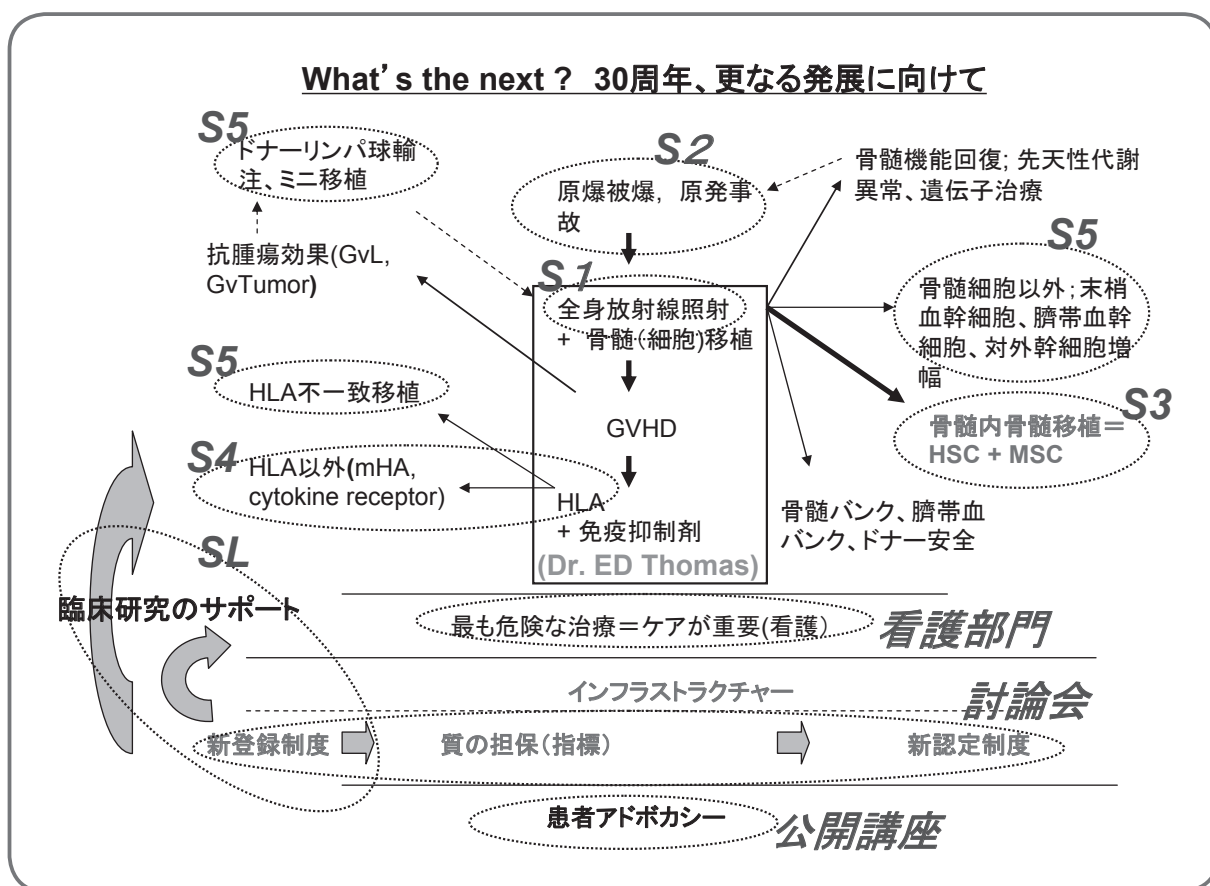
「医療の質」に対する患者・国民の要求が大きくなってきている。「医療の質」の計測には「構造 (Structure)」、「過程 (Process)」、「結果 (Outcome)」が用いられるが、最も危険な医療の一つである造血細胞移植医療に対しては、「結果 (Outcome)」を指標とする「質の保証と向上」が求められている。

このような要求に対し、アメリカでは強制的な全例登録制度がスタートした。登録無ければ保険が支給されないと聞いている。そこで「New Era of Registry System in HSCT (仮)」と題した特別講演を Dr. MM.Horowitz をお願いした。

一方、日本では、やっと登録の一元化が進められている段階であるが、「質の保証と向上」に対応すべく「認定制度 (仮)」が設けられようとしている。そこで公開討論会「新登録制度・新認定制度、何故・今？」を準備した。インフラ整備の大きな変革時期、大いに議論し、患者・国民の要求に答えられる制度を創ろうではありませんか。

総会の全体像はホームページ (<http://www2.convention.co.jp/jshct2008/>) をご覧下さい。

(図)；総会の全体像を図示しました。



## 第12回 Asia-Pacific Blood and Marrow Transplantation Group (APBMT) 会議報告

名古屋大学医学部 造血細胞移植情報管理学講座

吉見 礼美

第12回 Asia-Pacific Blood and Marrow Transplantation Group (APBMT) 会議が、2007年9月21日より23日まで北京において第11回 International Society of Hematology Asian Pacific Division (ISH-APD) 会議と併催された。学会長は北京大学の Dao Pei Lu 教授が務めた。学会場は現在建設中である北京オリンピック競技場近くの国際会議場であった。両学会で20の講演の他、91の口演、179のポスター発表があった、日本から多くの参加者があり、3つの講演、13の口演と1つのポスター発表があった。

2日目の夜には Business Meeting が行われた。昨年9月、名古屋で行われた第11回 APBMT 会議の Business Meeting において、JSHCT 寄付講座である名古屋大学造血細胞移植情報管理学講座に APBMT のデータセンターと事務局を置くことが合意され、本講座の教官が実務にあたっている。本年度は APBMT 参加国・地域における疾患、ドナーおよび幹細胞ソースごとの過去の移植件数を初めて調査した “Transplant Activity Survey” が行われた。これまでに日本を含め7カ国が調査に協力し、408施設、39,850件の移植件数が集められた。日本が大きな割合を占めているが、中国とイランなどアジア諸国における近年の移植数の増加も著しい。この調査結果は本講座教官により学会で発表され、年次報告書として冊子が作成された。近日中に APBMT ホームページ (<http://www.apbmt.org/>) にも掲載される予定である。

また APBMT におけるこの一年のもうひとつの大きな動きとして、他の国際移植登録機関である European Group for Blood and Marrow Transplantation Group (EBMT) と Center for International Blood and Marrow Transplant Research (CIBMTR) との協力関係が強化され、登録における基本調査項目の国際的な統一が進められてきた。また今年の3月にリヨンで行われた EBMT 会議中には APBMT、EBMT、CIBMTR と World Marrow Donor Association (WMDA) を中心に、造血細胞移植登録に関する国際的ネットワークである “Worldwide Group for Blood and Marrow Transplantation (WWBMT)” が設立され、第一回会議が開催された。今回の APBMT の Business Meeting において、APBMT が WWBMT に主体的に参加していくこと、EBMT と CIBMTR と基本調査項目を共有することで合意がなされた。

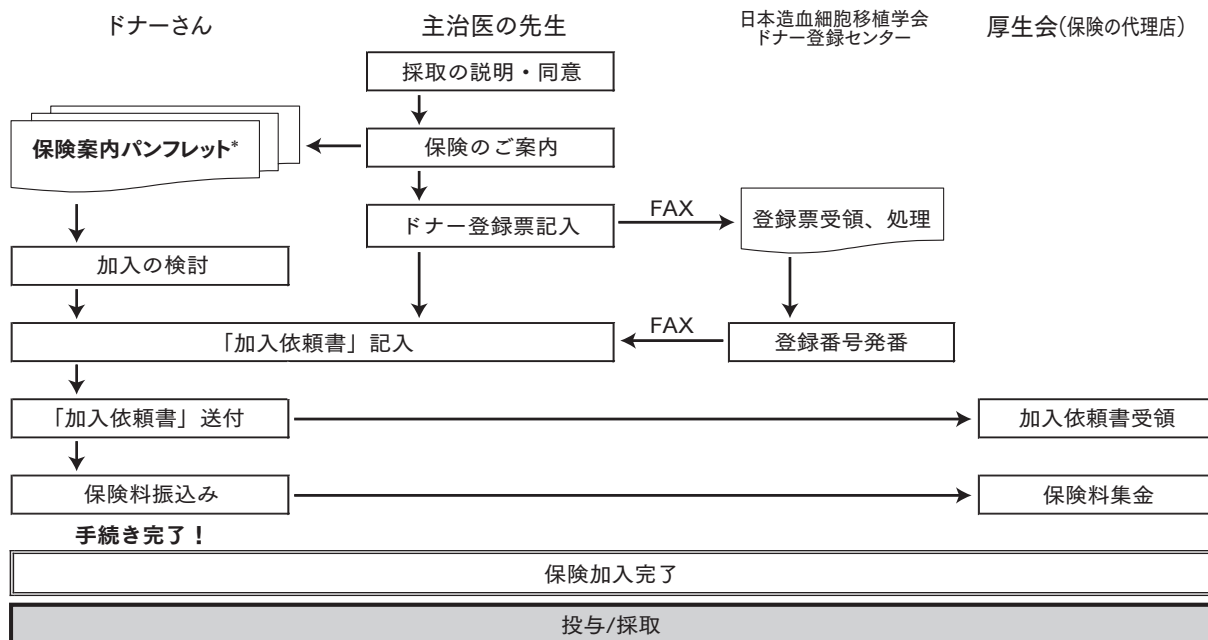
本学会はアジア地域での近年の造血細胞移植医療の発展とグローバルレベルでの移植登録事業に関する協力体制の強化が確認された有意義な学会であった。次回 APBMT 会議は2008年4月25日-27日に台湾の台北にて開催される予定である。会長の Po Min Chen 教授は岡山大学への留学経験もあり、日本語も堪能な方である。APBMT はアジアの移植医、研究者が自らの手で作り上げる国際学会であり、日本の責任を実感させてくれる学会である。海外への新たな目を向ける良い機会であるので、会員諸氏の参加を希望する。



2005年4月から開始されました血縁造血幹細胞ドナー（骨髄・末梢血）フォローアップ事業は皆様のご協力により概ね順調に推移しております。只、これに連動しているドナー傷害保険に關しまして分かり辛いことがあるとの会員の声がありますので、このページを借りてお知らせいたします。尚、これは本誌が皆様に届く頃には、ドナー登録センターからも全国発送され、且つHPにも掲載されることになっているものです。

《ドナー様及びドナーのご家族の方、主治医の先生へ》

■ドナー登録と保険加入の流れ



\* 通常保険案内パンフレットは、主治医の先生が登録センターへドナー登録をした後に、登録センターよりその他登録後書類と一緒に郵送にてお送りしていますが、お手元にある場合はそちらを使用させていただいて結構です。

※保険加入の申し込みを受けて、学会側で適格性の判定を行う場合があります。その結果**不適格**と判定された場合は厚生会よりドナー様ご本人へ連絡がいき、保険料は返金されます。主治医にも不適格の連絡は致しますが、これはあくまで保険加入に対するの判定であり、ドナーになることの判定ではありません。

■お問合せ先

【保険案内パンフレット請求先及び、保険の加入に関するお問い合わせ】  
 株式会社 厚生会  
 〒101-0021 東京都千代田区外神田3-5-5-405  
 TEL 03(3255)6314  
 FAX 03(3255)6315

【保険適格性基準に関するお問い合わせ】  
 寄附講座 名古屋大学医学部造血細胞移植情報管理学  
 〒461-0047 愛知県名古屋市東区大幸南1-1-20  
 TEL 052(719)1974  
 FAX 052(719)1973

【ドナー登録に関するお問い合わせ】  
 日本造血細胞移植学会 血縁造血幹細胞ドナー登録センター  
 業務委託先:イーピーエス株式会社  
 〒450-0002 名古屋市中村区名駅3-25-9 堀内ビル6階  
 TEL 0120-50-7584(フリーダイヤル) / 052(588)6325  
 FAX 0120-60-7584(フリーダイヤル) / 052(588)6326

**施設紹介****広島赤十字・原爆病院**

岩戸 康治

広島赤十字・原爆病院は広島市の中心部にあり、18診療科を有し病床数666床の基幹病院です。また平成18年8月には広島県がん診療拠点病院の指定を受け、毎日多数の血液疾患患者の診療を行っています。

当院では年間約120症例の白血病、骨髄異形成症候群、150症例の悪性リンパ腫、40症例の多発性骨髄腫の新患を受け入れており、これらの血液悪性疾患に対し無菌室をフル稼働させて、完治を目指したintensiveな化学療法および移植療法を行っています。許泰一第4内科部長、麻奥英毅検査部長、岩戸康治輸血部長を中心として、計7名の医師で診療にあたっており、円滑な診療を行うために現在でも若い先生方の参加を必要としています。

平成19年には血液疾患患者用の29床、4診察室、固形腫瘍患者用の9床を備えた「血液・腫瘍治療センター」を開設し、1日100人近い血液疾患患者の診療を行っています。紹介患者については広島県内はもとより、中国地方や全国の様々な地域からの受け入れを行っています。

入院病床は6号館および本館8階のフロアーが血液内科専用病棟となっており70床を有し、バイオクリーンルーム3床を含め無菌室34床、簡易アイソレーターを備えた病床を含め一般病床が36床、またその他の混合病棟にも血液内科一般病室があり、全体で約100床を有しています。また血液内科専用病棟には63名の看護師を配置し、常に稼働している状態で、多くの血液患者の受け入れを行っています。

アフレーシス室では5台の成分採血装置を備え、専任看護師を配置し臨床工学技士や血液内科医師とともに、血小板採取、末梢血幹細胞採取、ドナーリンパ球採取、血液型不適合移植時の赤血球除去または血漿除去を行っています。

造血幹細胞移植は1985年に第1例目の同種骨髄移植を開始して以来、2006年末までに約350症例を経験し、年間20から40症例の同種移植（骨髄移植、末梢血幹細胞移植、臍帯血移植）を行っています。白血病においては強力な化学療法に抵抗性の難治例や再発例の同種移植を数多く経験しています。最近では臓器障害を有する症例においても、ミニ移植の導入や支持療法の改善を行い積極的に同種移植に取り組んでいます。自家移植についても年間約30症例と多く、難治性悪性リンパ腫や多発性骨髄腫、全国から紹介されるアミロイドーシスの症例に対しても積極的に行っています。自家移植再発後などの難治性悪性リンパ腫に対しては同種移植を施行しています。また、骨髄バンクからの非血縁者骨髄採取においては、小児科とあわせ200例以上の経験があり、全国でも有数の骨髄採取病院となっています。

当科では、化学療法であっても、移植療法であっても長期間にわたり一貫して自施設で診療することを原則としています。そのためには患者さんのみならずその家族と主治医との密接な連携を図り、発熱などの病態の変化にも迅速に対応することを心がけています。医師と医療スタッフとの密接な連携はいうまでもなく、患者家族と医療スタッフとの連携にも力をいれており、看護師主催の患者家族会を1ヶ月から2ヶ月に1回開催しています。看護師との信頼関係をより深めることで、患者家族が積極的に医療スタッフに相談できるようになり、早期の問題解決につながることに重点をおいています。このような医療スタッフと患者家族との連携のもと、多数の血液疾患患者の診療を行っています。

## 臨床試験について思うこと

名古屋大学血液・腫瘍内科 寺倉 精太郎

名古屋第一赤十字病院(第一日赤)で研修をした。同種移植を積極的に行う施設である。実際ミスマッチ移植や高齢患者さんの移植依頼も多くあり、どこに地雷が埋まっているか分からないスリリングな病棟を毎日往ったり来たりしながら、たくさんの臨床経験を積むことができたと思っている。そんな第一日赤血液内科では、私がfixした当時1999年ごろには1997年ごろまで行っていた急性GVHDに対するステロイド・パルス療法を見直している時期だった。現在フレッド・ハッチンソン癌研究所に留学中の西田徹也先生がステロイド・パルス療法よりもメチル・プレドニゾン 2mg/kgのほうが急性GVHDに対する初期治療として移植予後を改善するというデータを出され、それを施設の標準治療として行うようになっていた。私はというと、おりしも40歳以上の比較的高齢の移植患者さんが徐々に増えるにつれ、どのような方向性をとることが望ましいのか知るため、高齢患者さんの移植のデータをまとめるということを命じられた。その結果は、「再発はほとんどないが治療関連死亡が多い」という、今思うと(多分当時も)かなり当たり前の結果であった。

当時の第一日赤の前治療はおそらく日本一強力だった。基本的にすべての患者さんに強化レジメンを用いていたし、非寛解の患者さんともなれば一層の強化レジメンを用いていた。若い患者さんに対して行っているうちは合併症を引き起こしてもどうにか乗り切れたのだが、比較的高齢の患者さんに対して行った場合にはTMAなどの合併症によって失うことが多いことが分かった。そこで前治療を弱めてみようということになったのである。これは第一日赤史上画期的な出来事の一つであったと思うが、こうした経験を通して私は過去のデータを見直し、問題点があればそれに対して臨床試験としてアプローチするという姿勢を身につけさせていただいたと思っている。その後もいくつかの移植に関する臨床試験に関わらせていただいているが、そのおかげでそれなりの経験を身につけると同時に臨床試験の限界を知ることもなった。

移植の領域では臨床試験で行うべき事柄と実地臨床で行う事柄の間の線引きが難しい。様々な抗体療法薬・分子標的治療薬・新規抗ウイルス薬などが利用可能であるにもかかわらず、健康保険の適用を受けていないという現状ではなおさらである。私のセンスでは臨床試験でやるべきだろうと思うことを、実地臨床として報告されることをよく耳にする。みんな患者さんにとって「良かれ」と思ってやっている治療であるが、それが結果として患者さんのためにならないことだって勿論ありうるし、その可能性は説明する必要がある。もちろん「良かれ」と思うことは進めてみるべきだろうから、そうした「良かれ」という気持ちを臨床試験として吸い上げ、遂行していくことができる環境作りが今求められているのだろうと思う。じゃあどうしたらいいのかといわれると困るが、まずは試験で行うべきことの範囲を学会員が共有することから始まるのではないかと思っている。

## 事務局について思うこと

有限責任中間法人日本造血細胞移植学会  
事務局 半田 真人

私が事務局を担当させていただくことになってから1年余が経った。初めて勤務した頃は折しも学会は法人格を取得するところで、同時に学術集会の準備を進めているという状況だった。全く右も左も分らないまま次々に押し寄せてくる難問(私にとっては)を無我夢中でこなしている間に月日が経っていたと言った方が近いかもしれない。

これまでに取り組んできたことは、学会の法人格取得とそれに伴う諸手続(定款の策定、定款に合わせた各種委員会規約の改定)や各種会合開催のお手伝いとその記録を保存すること、会員情報の整備、年会費請求書の発行などで、特に、会員の皆様のご連絡先を把握することを重点的に進めてきたが、めまぐるしい動きを常に反映させることの難しさを実感した。

とは言え、若干1年余の経験であり、耳にする言葉、目にするもの全てが新鮮だ。もちろんそれらは時に戸惑いや緊張を伴うことは言うまでもないのだが...

振り返って見ると、いくつかの出来事が、そして様々な人々の顔が思い起こされる。次から次へと、場面展開の速い映画を見ているようでもある。それらを思い起こしている間にも、息つく暇もなく次の出来事が起きそう(会員の皆様はもっと忙しい日々を過ごされているのかも知れませんが)。そういう毎日の中で気がついたのは、それらの出来事も人々も私にとっては、全て「先生」なのではないかということだ。会員の皆様や、指導してくださる諸先生方、連携して事にあたる学会データセンターの人達に限らず、事務局の置かれている名古屋大学大幸医療センターの人々、学生達、出入りの業者の人達、またその環境のなかで起こる様々な出来事がそれぞれ何かを伝え、また、なにかを示唆している気がする。必ずしも耳過ぎしのいいこと、目に優しいことばかりではないが、多くのことに気づかされる。そしてそれが大切だと思う。

現在、事務局は人員を補強し、学会の更なる発展にお力添えできるように体制を整えているところで、近く予定されている学会の一般社団法人化に向けての準備段階でもある。

私達には、会員の皆様や社会からの要望に応えられる職業人としての人格を磨くこと、業務にたいする確信、迅速性、柔軟性を持つことがより一層求められるだろう。

これからも、会員の皆様の声を反映させながら、微力を尽くしたいと思います。

---

「会員の声」欄への投稿を広く会員の皆様から募集します。

次回の「JSHCT Letter No.29」は、12月に発行が予定されております。

---

- **平成20年度新評議員応募申請について**

平成20年度の新評議員応募申請期間は10月1日(月)から11月16日(金)消印有効です。

- **平成19年度会員名簿に関しまして**

平成19年度会員名簿の発行を12月を目処に進めております。記載内容の変更をご希望される方は10月29日(月)まで受け付けておりますので、至急お送りください。尚、ご返信がない場合は現在のご登録内容を記載させていただきますので、予めご了承ください。

- **年会費について**

平成19年度までの年会費のお支払がまだお済みでない方は、お早めにご納入ください。

【事務局より】